

陸軍大日記の中のスキー

—仮想敵国ロシアに対する冬季作戦からの考察—

名古屋 貢

I. はじめに

日本のスキーは明治44(1911)年1月にオーストリア武官レルヒ少佐が、高田歩兵第五十八連隊の将校と下士官に教えたのが最初とされている。その様子を伝えるものとして日本スキー発祥100周年委員会作成の『日本スキー発祥100周年』⁽¹⁾がある。そのなかで描かれたレルヒとスキーは現在の日本人が思い描く像に近いものである。

日本のスキーの歴史は、1911年(明治44年)1月12日、レルヒ少佐の「メテレスキー(mettez les skis !:スキーを履きなさい)」の掛け声とともに始まりました。そもそもオーストリア＝ハンガリー帝国参謀本部の将校であるレルヒ少佐が来日したのは、軍事視察のため1904年(明治37年)から始まった日露戦争で「アジアの小国であった日本が、なぜ強国ロシアに勝つことができたのか」を検証するため、各国が軍事視察団を派遣していました。レルヒ少佐も、そんな軍事使節団の一員。それがなぜスキーを教えることになったのでしょうか。レルヒ少佐が横浜港に到着したのは、1910年(明治43年)11月30日。新潟県の高田に赴任したのは翌1月5日で、それまでの約1ヶ月の期間は東京に滞在。2組のスキーを持参して、赴任地に雪国の希望を出していました。おそらく、このあたりから彼がスキーの名手であることが判ったのではないのでしょうか。

本稿は、明治43年の陸軍大日記「大日記乙輯」「瑞典国軍隊用スキー実験ノ件」のなかから、スキーが日本に持ち込まれた経緯や、レルヒ少佐が着任以前に高田第十三師団内部でスキー研究を開始していたこと、そしてスキー方式には2種類あったことなどがまとめられているので、それらを中心に陸軍がスキーを研究するにいたった背景を含め考察してみようと考えている。「瑞典国軍隊用スキー実験ノ件」はスキー研究者の間では、すでに研究され尽くした感のある文書ではあるがスキー練習を開始した時のスキーの製造は何処で行ったのか等、幾つか検討されていない箇所もあるので、今までとは違った視点から考察することにした。

先行研究としては新井博氏の『レルヒ 知られざる生涯』⁽²⁾がある。その論文にはレルヒが軍人であったことに着目しその生涯を種々の資料を利用し克明に描いており、スキーの発達史にとって非常に有益な研究である。そのため本稿も様々な箇所を引用した。また、高田第十三師団長長岡外史の孫にあたる長岡忠一氏の『スキーの原点を探る』『日本スキー事始め』の2冊は、資料では埋めきれない部分についての記述が多くあることから随所で利用した。その他に参考にした文献としてレルヒ少佐関連の写真集『スキー発祥 思い出アルバム』⁽³⁾がある。そのアルバムは「スキー研究報告及意見」だけでは判らない細かなこと、例えば将校がスキーを使用する場合は指揮刀を杖に縛り付けるなど、文章だけでは見逃しそうな事柄について十分な画像情報を提供してくれるもので、まさしく「百聞は一見に如かず」の貴重な資料であった。

II. 陸軍大日記「瑞典国軍隊用スキー実験ノ件」について

陸軍はスキーをどの様に考えていたのかを「瑞典国軍隊用スキー実験ノ件」⁽⁴⁾から検討してみる。

明治 43(1910)年 6 月 13 日に瑞典(以下はスウェーデンとする)駐在の杉村虎一公使から寺内正毅陸軍大臣に書状が届いた。その書状には、スウェーデン軍隊は冬期雪中の行軍及び偵察に「スキーなるもの」を使用しているので、日本陸軍も満州や韓国など雪の多い地方で試してみることを薦めてきた。それとともに、スウェーデン陸軍が使用しているスキー 2 組は船便で、スキー使用説明書は別封書留便で陸軍大臣宛に送ってきたのである。その手紙には以下のように記載されている。

……当瑞典国軍隊ニ於テハ冬期雪中ニ於テ歩兵ノ行軍偵察等ノ為メニ「スキー」ナルモノヲ使用シ大ニ便益ヲ得居候
本邦ニ於テモ北国地方又ハ満州韓国等ニ於テハ「スキー」ヲ使用スルコトヲ得可ク或ハ我が陸軍ニ於テモ御試用相成候テハ如何ト存ジ候ニ付軍隊用「スキー」ニ組当国ヨリ直航ノ船便ヲ以テ御送付申上候
右「スキー」ノ使用法説明書ハ別封書留郵便ヲ以テ御送付申上候……右「スキー」ノ荷送状ニ有之候運賃ハ小生ニ於テ当地「ゴッテンブルグ」ヨリ横浜迄ノ分ハ当国汽船会社好意ヲ以テ別ニ運賃ヲ申受ケズ……六月十三日……

杉村公使からの手紙が日本に届いた日時は、陸軍が封書に張り付けた附箋から明治 43(1910)年 9 月 20 日であることが確認できる。しかし、スキーと書留の到着日は不明であるが杉村公使の手紙と同時に送付したスキーが届くまで日本にはスキーの実物も参考書籍も存在しなかったか、若しくは、スキーの存在は知っていたとしてもスキー研究は為されていなかったのである。そして陸軍はスキー到着後しばらく留め置いたとする説もあるが、スキーは到着したが雪が降る冬季まで訓練を着手することが出来なかったと考えられる。

スウェーデン公使が陸軍の送付したスキーの足取りが明らかになったところで、今度はレルヒ少佐の日本での足取りを探ってみる。前出『レルヒ 知られざる生涯』ではレルヒ少佐が祖国のトリエステ港を出港したのが明治 43(1910)年 9 月 27 日で日本に到着したのは同年 11 月 30 日としている。すなわちレルヒ少佐は、日本にスキーが到着した頃に故国を後にしたのである。

そして、レルヒ少佐が日本到着から高田着任までの行動は、到着 10 日後の明治 43(1910)年 12 月 10 日オーストリア大使館付駐在武官フランツ・プッツ少佐が陸軍副官宛に出した質問状「外国武官学校参観ノ件」⁽⁵⁾から知ることが出来る。プッツ少佐はレルヒ少佐着任の約半年前の明治 43 年 6 月 3 日に来日したオーストリア大使館附陸軍武官である⁽⁶⁾。そのプッツ少佐が副官にあてた質問状は、レルヒ少佐と共に陸軍付属学校を参観したいということと、レルヒ少佐の任地を日本陸軍に問い合わせたのであった。その内容は前出『レルヒ 知られざる生涯』⁽⁷⁾の中でも詳しく説明しているので本稿はその概要を述べるにとどめるが、プッツ少佐の質問状で二点の重要なことがある。第一に、質問状の投函日が同年 12 月 10 日とあることから、翌年 1 月 1 日に着任予定で来日したレルヒ少佐の任地が質問状提出のその日まで決定していなかったということである。第二は、レルヒ少佐は任地として雪のある地方を希望していた。その理由はレルヒ少佐がスキー熟達者で本国から 2 組のスキーをわざわざ持参しており、場合によってはスキーを教えることができるというものであった。即ちレルヒ少佐は任地として雪のある衛戍地を希望していることから、巷間言われるような訪日の目的がスキーの普及にあったということは間違いである。このことについてはレルヒ自身も来日目的が純軍事的な理由によるものだとわざわざ断っている⁽⁸⁾。

その質問状に対して、陸軍大臣秘書官から同年 12 月 26 日午前 9 時から戸山学校参観を許可する旨の連絡があった⁽⁹⁾。その連絡に二人は戸山学校で如何なる訓練を参観したのかと、それに対する戸山学校側の評価がプッツ少佐の質問状と一緒に密大日記に綴じられているので見ておく。それによれば、プッツ少佐

とレルヒ少佐は通訳1名を従えて同月26日9時に戸山学校に出向き、約2時間にわたり諸演習を参観した。その内容は以下の通りである。

- ・教導大隊ノ一中隊教練実施
- ・体操科付士官フシテ体育教範所載ノ徒手及器械体操施行
- ・同シク銃剣術及軍刀術ノ基本演習並ニ互角試合

そして二人の評価は明治44(1911)年1月12日に教育総監庶務部課長町田彦二が演習視察状況に付いて感想をまとめ陸軍省副官竹島音次郎宛に提出している。それによれば、戸山学校側が準備した参観内容は両名の希望と合致していたようだということと、「……終始端正謙讓ノ風アリシハ従来来校セシ外国武官ニ見エサリシ所ナリ……」と好印象の人物であったことを報告している⁽¹⁰⁾。

話をもどすと、レルヒ少佐とプッツ少佐が戸山学校の参観を許可された同日の明治43(1910)年12月17日付け「瑞典国軍隊用スキー実験ノ件」⁽¹¹⁾と題する通牒が陸軍高級副官から第十三師団参謀長に送達されている。その通牒内容は以下のとおりである。尚、通牒が出された第十三師団とは日露戦争中の明治38(1905)年4月1日に増設された部隊で師団長は長岡外史であった。また、長岡は師団長着任前の軍務局長時代に臨時軍用気球研究会長を務めるなど新兵器に深い理解を示していた。

……瑞典軍隊用スキー二個及之ニ関スル書籍三冊同国駐箭杉村公使ヨリ当省大臣ニ寄贈有之候処
今般陸普四九八〇号ニ依リ貴師団歩兵第五十八連隊付ノ儀御達相成候奥国(オーストリア)武官ド、
レルヒ少佐ハ斯道ニ熟達ノ趣ニ付右スキー及書籍及送付候条適宜ノ方法ニ依リ実験ノ上其成績及御意見報告相成度依命及通牒候也……(カッコ内は筆者追加)

陸軍は第十三師団麾下の歩兵第五十八連隊にオーストリア出身でスキーに熟達したレルヒ少佐を連隊付として派遣を決定したと、同時にスウェーデン軍隊用スキー2組と書籍3冊を送付したこと、そして、スキー実験の開始とその報告を命じた。すなわち、陸軍はレルヒ少佐とプッツ少佐が戸山学校の参観を許可した当日にレルヒ少佐の任地を高田と決定したのである。

ところで当時のスキーの方式は、スウェーデン大使が送ってきたノルウェー式スキーと、レルヒ少佐が本国より持参してきたオーストリア式スキーの2種類があった。外見上の区別は、ノルウェー式は靴をベルトで固定するが、オーストリア式は金具の先端にバネを利用しており取り扱いや用途が異なっていた。スキーの形状の違いは、その後第十三師団が作成した明治44年4月にまとめた「スキー研究報告及意見」⁽¹²⁾の中に図があるので参考に掲げておいた。「図1. ノルウェー式スキー」「図2. オーストリア式スキー」参照。陸軍副官が第十三師団に送付したスキーはスウェーデン大使が陸軍大臣寺内正毅に寄贈した2組のノルウェー式スキーであった。副官はスキーの方式の違いがあることを理解していなかったため、実物のノルウェー式スキーとスキーの熟達者であるレルヒ少佐を隊付として高田に勤務させることでスキー研究の一助とする程度にしか考えていなかったのである。

通牒を受けた第十三師団は明治43(1910)年12月28日に参謀渡辺小太郎から陸軍省副官竹島音二郎宛てに第五十八連隊が駐屯する地方において最も必要な研究であることから、「スキー研究規定」に従い実験を開始したと返答している。渡辺参謀の返答書から考えて明治43(1910)年12月17日付の通牒「瑞典国軍隊用スキー実験ノ件」が届いてから僅か10日間ほどでスキー実験の研究計画書「スキー研究規定」を作成したと考えられる。尚、前出「スキー研究報告及意見」の中でスキー研究委員会を組織した日付は明治43(1910)年12月17日とあることから通牒と同時に組織されたのである。

次に、歩兵第五十八連隊に送られスキー2組のスキーの扱いと、研究委員会がどのような対応をしたのかを前述の「スキー研究報告及意見」より見ておく。それによれば、最初に受領したスウェーデン軍隊用スキーの内訳はノルウェー式山地用及び平地用スキー各一組と杖4本であった⁽¹³⁾。(図7. 山地用スキー(ノルウェー式)参照)。早速、参考書の翻訳や研究方針の策定などを始めるとともにノルウェー式スキーを十数台模倣し明治44年1月初旬からスキー研究を開始したが、スキーに関する知識はなく、参考になるものはスウェーデン公使が送付した書籍から作成したスキー書抄訳程度であった。そのためスキーの扱い方に苦慮することとなり平地若しくは緩斜面で滑走を試みる程度で、とても本格的なスキー研究を開始できる状態ではなかった。そこで、研究員はスキー熟達者レルヒの高田着任が決定していたので、彼の到着を待ってスキー研究を進めようと考えていたのである。その研究計画書ではスキー方式の違いについては触れていない。それは、研究委員会がノルウェー式とオーストリア式では形状や取り扱いが異なることを、レルヒ少佐が持参したオーストリア式スキーを見るまでは知らなかったのである。

スキー研究開始時期の様子は、明治44(1911)年10月13日外務大臣伯爵林薫が内閣総理大臣侯爵西園寺公望宛てたオーストリア陸軍参謀少佐テオドル・ド・レルヒ少佐叙勲の上奏書の中にも見ることが出来る⁽¹⁴⁾。尚、下線は筆者が追加した。

奥国陸軍参謀少佐

勲四等旭日章 テオドル・ド・レルヒ

右ハ本年一月ヨリ見学ノタメ歩兵第五十八連隊ニ隊付トシテ到来著候処先是陸軍省ヨリ諾威式雪靴使用法ノ研究ヲ第十三師団司令部ニ命シ司令部ハ降雪トトモニ之カ研究ヲ開始シタルモ其操縦術只書籍ニヨルノミナルハ更ニ目的ヲ達スル能ハス苦心慘憺ノ折柄恰モ好シ同少佐来著シタルヲ以テ同師団長ハ該操縦術ノ伝習ヲ同少佐ニ囑託シタルニ同少佐ハ之ヲ快諾シ将校下士約三十名ニ公務ノ余暇日日数次官宛野外ニ於テ嚴寒風雪ヲ冒シ誠意熱心該操縦及書籍以外ノ口授ヲ伝習シ融雪期ニ至ル頃無遺憾習得セシメタルノミナラス学校郡衛等ノ教職吏員等ニ伝習シ習得セシ人員八十名ニ達セリ従来信越地方ニ於テ降雪期ニ使用セル歩行具ハ「カンジキ」ヲ以テ唯一ノモノト為スト雖モ頗ル不便ニシテ一日工程二三里ヲ出テ到底敏活ノ交通ヲ為スコト能ハサリシカ該雪靴ヲ用フルトキハ殆ント普通徒歩同様ノ速度ヲ出シ險路峻阪ト雖モ亦容易ニ交通スルコトヲ得其効果著大ナリトス今ヤ此歩行具ヲ完全ニ使用スルコトヲ得タルハ全ク同少佐ノ誠意伝習ノ結果ニ外ナラス為メニ我軍事上ニ致セル功績顕著ニ有之候ニ付テハ右功績ヲ御表彰被遊頭書ノ通叙勲被仰出度皆陸軍大臣男爵石本新六ヨリ申立有之候該勲章下賜候様仕度此段謹テ奏ス

明治四十四年十月十三日

外務大臣伯爵林薫

外務大臣林薫の上奏書には、第十三師団ではレルヒ少佐到着以前にノルウェー式スキーの研究を開始したが参考になるものは書籍しかなく悪戦先苦闘していたところにレルヒ少佐が第五十八連隊に着任したことから、師団長がレルヒ少佐にスキー伝習を囑託したところ快諾したとある。この上奏書からも今まで検討してきたスキー研究開始の経緯と一致する内容である。すなわち、レルヒ少佐の任地が決定した時にスキーを伝習までは命ぜられてはおらず、着任後師団長より依頼されたのである。

また、「スキー研究報告及意見」には、今まで見過ごされてきたことではあるが、レルヒ少佐が高田に着任前の東京での行動も明らかになっている。それは任地が決定した明治43年12月17日以降、直ちに東京砲兵工廠にリリエンフェルト式縮具を付けたオーストリア式スキー10台の製造を依頼し、出来上がったスキ

一は高田に搬送され研究委員会に寄贈したのである⁽¹⁵⁾。その後、第十三師団はスキーの練習者が増えたことから東京砲兵工廠に60台のスキーの製造依頼を行なった⁽¹⁶⁾。そのため「スキー研究報告及意見」のなかにはスキーに関する値段に製造場所により異なった値付けとなっている⁽¹⁷⁾。当時の単価は、付属金具はノルウェー式が1.4円、高田で作られたオーストリア式は2.8円、砲兵工廠製のオーストリア式は2.5円であった。また、スキーに靴を固定する革製品は0.65円で、杖の価格はノルウェー式0.45円で、オーストリア式0.35円となっている。また、スキー一式の価格はノルウェー式4.40円、高田で作られたオーストリア式5.80円、砲兵工廠製は4.47円となっている。スキーの価格表は「表1. スキー種別毎の単価表」として巻末に掲げておいた。

更に「スキー研究報告及意見」の内容を見てゆくと、レルヒ着任前に第十三師団は現地業者にノルウェー式スキーを手本に模造品10数台の製造を依頼していたとの記述がある。そのためレルヒ少佐が高田を訪れた頃の第十三師団には、スウェーデン公使が送ってきたノルウェー式スキー2組と、研究委員会が独自に製造したノルウェー式10数台の合計12台程のノルウェー式スキーが存在していた。それと同時期、第十三師団が独自にスキー製造を手掛けていることとは別に、レルヒ少佐は独自の判断で東京砲兵工廠に10組のオーストリア式スキーの製造を依頼していたが、その製造期間は発注から2週間が必要であったことから、製造依頼したスキーが高田に届く明治44年1月12日まではスキー訓練はできなかつたのである⁽¹⁸⁾。以上の事から、訓練開始時に使用できるオーストリア式スキーは東京砲兵工廠製造の10台とレルヒ少佐が持ち込んだスキー2台の合計12台しかなく、台数に限りがあったことから当初選抜の専修将校は11名になったと考えられる。訓練開始時の組織構成は以下のようになっていた。

長 歩兵第五十八連隊長 大佐 堀内文次郎

第十三師団参謀 大尉 山口十八

専修将校 大尉 鶴見宜信

中尉 明石直人

本間正文

富板田讓治

松杭利彦

高橋 良

少尉 高橋磧基

坪倉真二郎

師橋 渡

小暮廣三郎

小山田昇

合計14名

この章の最後に第十三師団が独自に開発した山口式に付いて簡単に触れておく。山口式は、スキー研究を命ぜられた第十三師団参謀山口十八大尉が高価なオーストリア式に代わるものとして藁沓と竹という廉価な材料を使用して作らせたものである⁽¹⁹⁾。山口式の名称はレルヒ少佐によるスキー教練が終了した直後の明治44年4月に作成した「スキー研究報告及意見」の中にすでに書き留められていることから、スキー研究員が研究開始と同時に急遽製造を命じた十数台のノルウェー式を改良したものではなかつたかと考えている。（「図3. 山口式スキー」参照）。山口十八大尉に関する余談として、レルヒがスキー教練の開始に

際してフランス語で命じたメテレスキー(mettez les skis!)であるが、レルヒの通訳をしていた山口大尉はフランス語が堪能であったことから、レルヒ少佐は母国語のドイツ語を使わずにフランス語で命じたことから発した命令であった⁽²⁰⁾。

III. 歩兵第五十八連隊でのスキー研究

明治44年1月から行われたレルヒ少佐のスキー講習が行われた後に第十三師団は参謀本部に命令されていた「スキー研究報告及意見」を提出することになるが、その報告書から陸軍はスキーをどのように利用する心算でいたのかを確認することができる。

陸軍のスキー運用について確認する前に、冬季訓練をどの様に行っていたのかについて陸軍大日記中に幾つか資料があるので簡単に確認しておく。日露戦争開戦後の明治37(1904)年10月4日に東京在住の樫製造者が製品の買上を願い出た資料がある⁽²¹⁾。それに添付の見積書では侃割竹製樫一足の値段は38銭となっている。ただし1000個以上の注文の場合は、一足に付2銭を割り引くとしていることから36銭となる。この値段が通常取引と比べて高いのか安いのかは不明であるが、陸軍では冬季の必需品として樫を利用していたことがわかる資料である。また、民間業者が陸軍に製品買上の嘆願書をさしていたことにも驚かされる。

そのほかにも陸軍が積極的に樫を利用していた記録がある。それは明治37(1904)年12月22日に第二師団の留守部隊から陸軍大臣寺内正毅に出された「藁靴調製支給ノ件」⁽²²⁾とする申請書がある。それによれば、第二師団管内の新発田と村松両衛戍地は冬季に積雪が多く、演習で野外や山野を軍靴で跋涉することは不可能であった。ところが、この申請書が提出された時期は日露戦争の最中でもあり、積雪を理由に軍隊教育を中止することはできなかった。そのため、野外演習では軍靴に換えて藁靴を履いて訓練を行っているので購入を願い出たものであった。第二師団が予算要求の理由として藁靴を演習に利用した場合の効能として高価な軍靴が傷まずにすむとしている。それに対して、主計課は第二師団後備隊に対して藁靴代金744円の支出を認めることとなった。日露戦争中の雪国にある部隊は、訓練中は軍靴を脱いで藁靴と樫で演習を行っていたのである。また、これと同時期に新潟県中蒲原郡村松町四二千二百三十九番地の時計屋から「藁靴用滑止器買上額の件」⁽²³⁾とする購入依頼が出された。その理由は、軍靴の代わりに利用した藁靴の滑り止めの売り込みを図ったものであった。以上のように日露戦争時の冬季訓練では樫や藁靴は必需品であった。そのため「スキー研究報告及意見」では樫とスキーとの比較がなされている。

スキーと樫の性能比較について「降雪後若干日にちが経過した場合」「降雪後数日を経過し表面が圧縮した場合」「降雪中」「最多量の降雪中か若しくは吹雪」の条件設定をしたうえで詳細な比較が為されている。それによれば雪質が「降雪後若干日を経表雪一度融解し寒気の為脚元凍結したるもの」の場合、スキーは山地では6から8kmの速度が出せるが、平地では5から6kmと若干速度がさがる。しかし、それと同じ条件で樫を使用した場合に山地では2.3から3.5km程度で、平地では3から4km程度の速度がせいぜいであった。凡そスキーと樫の速度差はスキーが2倍ほど早いということになる。次に「降雪後数日を至表雪圧縮したるもの」場合は、スキーは山地で4から6km、平地で3から5kmの速度が出せるが、樫では山地2kmで平地2から3kmとかなり速度が落ちる。その他に「降雪中」と「最多量降雪中又は吹雪」の比較があるが樫は殆んど使用に耐えない速度となる。スキーが樫に比べていかに優位であるかを明らかにしている。それと、スキーを履いて山地に入った場合に、登坂時間と滑降時間の比率も割り出しており、その比率は雪質の良否に関係し、良好の場合には登行4に対して滑降1の割合としている。また、雪質が不要の場合には登行

12に対して滑降1との良好な場合に比べて登坂時間は3倍ほど長くなるとしている。部隊運用を考える場合に雪質により部隊の移動時間を考慮する必要があることを示している。(「表2. 雪質による速度比較」参照)。

スキーを軍隊で使用する場合に、指揮官と兵卒では、その装備が自ずと違うことからスキー利用時の服装については以下のように述べている。携行歩兵武器をもつてのスキー利用は、将校の刀は杖に結束し、下士卒は銃を確実に肩にかけておく必要があると指摘している。そのことは『スキー発祥』⁽²⁴⁾中に平山でレルヒ少佐と専修将校がスキーを履いて整列した写真の中に、レルヒ少佐と将校は杖に刀を縛り付けると共に、刀をもたない専修将校は小銃を袈裟がけにかけていることを確認することができる。

スキーを使った部隊運用する場合の特徴として、各兵士のスキーの長さが2m30cmで更に行動の自由を得るために1mの間隔を加えて行軍の長さを計算するように求めている。また、山間地での行軍は2列以上にすることは難しく、そのため部隊の長径が著しく増大することから、指揮官により統一的な運用を考えるならば小部隊とならざるを得ないと説いている。そのうえで山地での行軍は地形、気象、雪崩などの災害に遭遇することもあり、その救出には一兵士に対して数人が協力する必要があることも考慮して部隊の最小人数を決定するならば、おのずと大規模な運用には不向きだということがスキー研究委員の判断であった。

次に、スキーの具体的部隊運用について述べている。それによれば内地で豪雪時には大部隊による戦闘は行うべきではないが、従来の雪中行軍は踏み固め隊を先頭として地形捜兵及び連絡兵を列外において使用することが望ましいとしている。但し、それも豪雪時にはそのような行軍方法も不可能だとしている。(「図8. 雪中行軍時のスキーの利用」参照)。

豪雪時に物資運搬は橇だけでは利用できないが、スキーと連結して橇を利用するならば機関砲、行李、負傷者の運搬が可能となる。そのほか、内地の北国地方では天災地変や非常出兵等で救援、捜査、偵察の目的で小部隊を差し向ける場合が多いであろうことから、その時にはスキーを用いた方が有利に任務を達成できるとしている。すなわち、スキーが有利な場合として小部隊による捜索及び警戒勤務、雪中行軍隊の利用、軍事物資の運搬と結論づけている。そのためか「スキー研究報告及意見」には、スキーの民間での利用や学校で冬季体育の一部とし活用すべきであるという、およそ軍事報告書としては珍しい結論を導き出している。そして、前出『日本スキー事始め』では第十三師団に常備するスキー台数は各歩兵連隊に百七台、騎兵二十三台、砲兵四十八台、工兵五十八台、輜重兵十六台、合計四百六十六台に決定したとしている⁽²⁵⁾。尚、軍事物資運搬の様子はレルヒ少佐の回顧談があるので引用しておく⁽²⁶⁾。

「南葉山系の地域で、われわれは二、三の軍事教練を実施した。機関銃隊が二台の機関銃をスキーにのせて、深雪の中を一、二〇〇メートルの地点まで登った。その際、機関銃を分解して補助スキーにのせて運搬した。しかし急坂の下りでは、銃身部が雪に埋まったりして掘り出すに苦勞したので、滑り止めの綱をつげた。天幕もヒュッテも実用的に設営し、炊飯にも利用した。各種演習を写真に撮り、それぞれの軍関係に送ったり新聞にも公開した。」

「スキー研究報告及意見」の中で、研究委員はレルヒ少佐の尽力と功績に対して長く記念すべきであると称賛を贈っている。その賞賛の具体的内容は明治45年1月にレルヒ少佐の勤務地を高田第五十八連隊から旭川第七歩兵連隊へ転属となる時に、歩兵第五十八連隊長平野金六は陸軍大臣男爵石本新六に明治45年1月31日付で提出した勤務成績書の中に見ることが出来る⁽²⁷⁾。その時のレルヒ少佐の評価は以下のようであった。

- 一、隊付間中隊勤務ハ第九中隊ニ大隊勤務ハ第二大隊ニ就イテ研究セシメ逐次連隊教育ニ及ボシタリ、一般ニ着眼適切ニシテ能ク要点ヲ会得シ細事ニ拘泥セザエ如キモ亦決シテ機微ヲ逸セズ殊ニ我国新兵教育ノ周到銃剣術ノ旺盛、夜間演習ノ奨励行軍力ノ強健發展及運動ノ快速且つ兵卒ノ温順ニシテ将校以下義務心ノ堅確ナルコト等ハ深キ注意ヲ払ヒテ視察セシヲ認ム然レトモ内務衛生經理ニ関シテハ殆ンド意ヲ留メザリシガ如シ
明治四十四年十月清国第演習及九州特別第演習ヲ見学シ從テ我師団ノ秋季演習ニ参加スルヲ得ザリシ
- 二、将校団教育ノ術科ハ屢々見学シ馬術ハ騎兵隊ノ隊馬ヲ用キテ自習セリ戦術ハ一ニ回出場セシメタリシカ常ニ正当ナル觀察ヲ為セリ
- 三、スキー術教育ハ至大ノ熱誠ヲ注キ年冬期ノ大部及本年一月中軍隊並ニ地方民ニ直接教育シ且ツ其普及ヲ図ル等我国スキー術歴史上ニ於ケル鼻祖トシテ降雪地方ニ与ヘタル恩恵頗ル大ナリトス
- 四、日本語学ハ殊ニ熱心且ツ興味ヲ以テ研究シ其進捗著シク日常ノ会話ヲ了解スルニ至リシノミナラス終ニハ簡單ナル席上演説ヲ稍々婉曲ニナシ得ルニ至レリ
- 五、軍規風紀ヲ守ルコト厳正ニシテ談話快活且ツ礼節ヲ重シ品行方正ナリ唯ダ日本人ニ比スレバ稍々堅ノ質ヲ欠クガ如ク性急ニシテ寧ロ無邪気ナリ
又特ニ日本美術品に就テ頗ル趣味ヲ有セリ其他日本ノ風俗慣習軍民ノ關係等ニモ觀察ノ歩ヲ進メタル形跡アリ
要スルニ中佐ハ有為ノ參謀官ニシテ著眼良好思想純正頗ル進取ノ気概ヲ有シ比較的多方面ニ亘リテ研究シ成績一般ニ良好ナリト認ム

明治45年1月31日

歩兵大五十八連隊隊長 平野金六

平野連隊長によるレルヒ中佐の評価は頗る高いものであった。またこの評価書からレルヒ中佐は日本語が流暢であったことと、日本美術の興味があったことなどが窺い知ることができる。前出の『スキー発祥思い出アルバム』⁽²⁸⁾中にレルヒ少佐の室内を写した写真があるが、その様子から鎧兜や掛け軸等があったことが確認できることから間違いのないことである。歩兵第五十八連隊でレルヒ少佐がいかに慕われていたのかがわかる文書である。

この章の終わりに明治44年1月に高田でスキー講習が行われると瞬く間に民間に広がることになる。それは民間でもスキーの購入が可能であったと考えられるので、その点について当時の新聞記事から確認しておく。大正2(1913)年3月31日付け北海タイムス「小出博士の講演」⁽²⁹⁾に、レルヒ少佐が高田でスキーを教えてから僅か2年しか経過していない時期のスキー記事がある。それによればオーストリア式スキーを利用する場合の体重とスキー長について以下のように分類していた。

- (一) 体重約十六貫匁(60kg)までと婦人及び児童用に対しては巾約二寸(6cm)
- (二) 体量十六貫匁より二十一貫匁(約60Kgから78.8kg)までは巾約二寸三分(約7cm)
- (三) 体量二十一貫匁(約78.8Kg)以上は巾約二寸六分(約8cm)

また、スキーの長さは児童用が約四尺五寸から五尺五寸(約136cmから167cm)で、大人用(男女共)約六尺から七尺六寸(約181cmから230cm)としている。その厚さは中央では約九分(約27mm)両端では約三分三

厘(約10mm)であった。それと、当時のスキー価格については、この記事が書かれた明治44(1911)年12月から明治45(1912)年1月までのウイーンにおけるスキー1組の値段は18から20クローネーすなわち1クローネーが41銭の交換比率であったことから7円38銭から8円20銭に相当した。そして国産品では、札幌で大人用7円から子供用2円で販売されていたことが書かれている。このほかに当時のスキー製作状況が判るものとして、少し時代は下がるが昭和11(1936)年2月22日の中外商業新聞に「スキーの常識」⁽³⁰⁾という記事がある。その記事には日本のスキー起原についての逸話と初期スキー製作者の名前を挙げられている。それによれば、スキーが日本に伝わってきた経緯の一つは「……まず初めて「スキー」が日本へ来たのは明治四十二年のことで当時北海道の札幌農学校の教授をしていたハンス・コーラー氏が瑞西のチューリッヒから、たった一台のスキーをとりよせ一部の生徒に教えたのがそもそもの始まりあるといわれる……」で、二つ目はレルヒ少佐の件である。もう一つは「……四十二三年ごろのこと横浜に在住していた外国人同士で組織していたスキー・クラブ員が五色温泉に行き盛んに滑った、そこで附近の人々がこれをまねた……」としている。それとスキー製造業者として大正5(1916)年頃新潟県高田市で山田善四郎、月岡源吾、大原清吉の諸氏が製造していたと書き記している。しかし、筆者は高田でノルウェー式スキー製造者についての詳細な記録をもっていないため、そのことについて記すことができない。今後の研究に待ちたいと考えている。

IV. 明治四十年帝国国防方針と歩兵第五十八連隊長堀内文次郎大佐

陸軍は何故に明治44年ころ冬季の軍事行動を想定した研究を行う必要があったのかについて当時の国防方針やスキー研究を進めた人物の人間関係なども検討してみる。

日露戦争に辛勝した日本は、明治39(1906)年頃から田中義一中佐を中心に日露戦争の反省を踏まえて国防方針の策定を行うこととした。その「帝国国防方針」策定の経緯とその内容について『帝国国防方針の研究』⁽³¹⁾から見てみる。それによれば「帝国国防方針」策定の経緯は明治40(1907)年1月29日に陸海軍間の協議が終了し、同年2月1日に両統帥部部長が天皇に国防方針を奉答した。そして、同年4月4日に天皇はこの「帝国国防方針」を裁可した⁽³²⁾。そのなかで仮想敵国はロシア、アメリカ、ドイツ、フランスとし、その優先順位は第一がロシアであり、第二がアメリカであった⁽³³⁾。すなわち、陸軍はロシアを、海軍はアメリカを仮想敵国としたのである。たしかに「帝国国防方針」と同様にアメリカにも日本を仮想敵国とする「オレンジプラン」という戦争計画はあった。しかし、策定したのは1920年代になってからであり日本海軍がアメリカを仮想敵国と決定よりも10年以上も遅いのである。このようなことから、日本海軍がアメリカを仮想敵国としたことは唐突であると共に「帝国国防方針」の特異性が際立つものである。

裁可された「帝国国防方針」の本来の狙いは、国防意思の統一と、陸海軍の軍備拡張や整備の正当性を確立するはずのものが、日露戦争の論功行賞的に陸海軍双方の装備要求をまとめただけで、陸海軍及び外交との協調は考慮されずに軍部内のみで通用する狭義の自己目的化した基準となっていた。当時満洲におけるロシアの脅威は急速に薄れつつあり、日本海においては日本に対抗できる海軍力は皆無であった。また、日本と諸外国間に残された問題は、日米間では日本移民排斥問題がくすぶり始め、中国との間では満洲における経済対立が生まれ始めていたが双方とも直ちに戦争に至るような危険な状態ではなかった。そのような安定した状況下においても陸海軍は継続的に独自の軍備拡張を行う強力な根拠を求めたのである。そのため、「帝国国防方針」は、日本の戦略的な安全を確実にすることよりも、陸海軍の組織的拡張や維持のための方針と数合わせであったといえる⁽³⁴⁾。

例えば、陸軍が算定した戦時兵力数は、作戦実行上の責任者である児玉参謀総長が四十個師団でも可能であるとしたが、兵力整備の責任者である寺内正毅陸相は山縣有朋元帥の推す五十個師団の意見に同調したことで五十個師団と決まった。児玉参謀長が所要兵力を四十個師団とした理由は国力不相応な軍費を求めないとする大局的な判断があったからである。それにたして五十個師団の根拠は極めてあいまいで、陸軍主力が満洲でロシアと対峙した場合に想定されるロシア軍は五十個師団と見積もったからではないかとされている。一方、海軍の軍備拡張計画の根拠は何であったのかといえば、「……米國ノ海軍ニ対シ東洋ニ於テ攻勢ヲ取ルヲ度トス……」とし「……東洋ニ在テ攻勢ヲ取トランカ為ニハ我海軍ハ常ニ最新式即チ最精鋭ナル艦隊ヲ備ヘサルヘカラス……」⁽³⁵⁾と云うことと、1906(明治39)年12月イギリスで「ドレッドノート」という革新的な戦艦が竣工したことから導き出された。特に「ドレッドノート(Dreadnought)」⁽³⁶⁾の影響は大きく、それまでの軍艦設計思想は根本的に異なり火力の集中と速度など日本海海戦の戦果を反映して造られており、それ以前に建造された軍艦は全て旧式となってしまった。そのため各国の海軍は大きな衝撃を受けると共に、その後は対応に追われることになるが、日本海軍も「ドレッドノート」出現により設計方針の変更を余儀なくされ、一艦隊8隻の艦隊を二個組織する八八艦隊の建設を目指すこととした⁽³⁷⁾。そして明治44(1911)年に斎藤実海相は八八艦隊の実現を目指し一等戦艦7隻、一等巡洋艦2隻等からなる総額約3億5200万円の「海軍軍備緊急充実ノ議」を西園寺公望総理に提出した。

陸軍は「帝国国防方針」が裁可されたことから早速兵備の整備に取り掛かることになる。日露戦争末期の日本陸軍は十七個師団と十六個後備旅団を基幹とする約200万人の兵力を数えていた。そして「帝国国防方針」で、陸軍の所要兵力は平時二十五、戦時五十個師団となったことから、その「整備要領」に従い明治40(1907)年度より先ず二個師団を増設し十九個師団とすることとし、そのために必要な予算は単年度1000万円を11年間に渡り支出することになった。その総額1億1千万円で、戦時三十八個師団体制が完成するのは明治51(1917)年となっていた。残りの六個師団の増設は財政状況が逼迫していることから漸次実施して行くことになったが、そもそも戦時五十個師団とする方針は財政悪化から計画通りに進めることは不可能に近かった。

ところでレルヒ少佐が高田でスキーを教えた明治44年頃、仮想敵国の最上位に位置づけられていたロシア軍の極東での状況は、急速に日露戦争敗戦の痛手から立ち直りつつあった。明治44(1911)年10月16日奥保鞏参謀総長は参内し天皇に「師団増設ニ関スル件」を内奏した。その中でロシアはシベリア鉄道の複線化と黒龍鉄道が完成する明治49(1916)年には極東に七十個師団の兵力を投入することが可能となるとことから、もはや兵数では対抗できなくなると報告した⁽³⁸⁾。そのような事態に陸軍は西園寺公望首相に対して、大正元(1912)年12月に平時二十五個師団体制で整備計画が決まっていない六個師団の一部である二個師団増設を提案したが財政難を理由にこれを拒否した。そのため、西園寺内閣の陸軍大臣上原勇作は帷幄上奏し、辞任した。その後、陸軍は、軍部大臣現役武官制を利用して上原の後任を出さなかったために西園寺内閣は総辞職し崩壊することになった。陸軍が師団増強を強引に押し通そうとしたことから様々な軋轢が生まれるが、なかでも軍部大臣現役武官制は軍部が合法的に政府を倒す手法となったのである。以上のように陸軍は対ロシア戦を考えるうえで必要な師団増設が儘ならないことに強い不満を抱いているころに、レルヒ少佐が来日し高田での勤務が始まったのであった。

次にレルヒ少佐が歩兵第五十八連隊隊長となった時の連隊長である堀内文次郎大佐とは如何なる人物であったのかを『信水堀内文次郎將軍を悼む』⁽³⁹⁾から確認しておく。堀内文次郎大佐は文久元(1861)年信州松代真田で生まれ、明治18(1885)年陸軍士官学校を卒業し直ちに教官となりになったのち、転じて陸軍省軍務課員となった。その後は台湾総督府副官、参謀本部高級副官を経て高田師団歩兵第五十八連隊長とな

った。

しかし、堀内大佐はその経歴の中では書ききれない重要な役目を果たしていた。そのことについて『信水堀内文次郎將軍を悼む』では、明治31(1898)年児玉源太郎陸軍中將が台湾總督府に就任した時に堀内文次郎少佐が台湾總督府副官となるが、その時、日露講和で重要な役割を演じることとなる玄洋社の杉山茂丸⁽⁴⁰⁾の知遇を得ることになった。杉山茂丸とは如何なる人物であったのかといえ、明治14(1881)年設立した玄洋社の創設時の構成員で、その社中には日露戦争中ロシアに対する諜報活動を行った明石元二郎大佐がいる。その明石元二郎大佐の活躍に就いて、のちの第十三師団長となる参謀本部参謀次長長岡外史は、明石の活躍は陸軍10個師団に相当すると評した人物である。

台湾總督府の時と児玉と堀内文の組み合わせは日露戦争の時も続き、児玉源太郎が奉天軍総参謀長で堀内文次郎は参謀本部高級副官を務めていた。(「図5. 明治38年堀内文次郎大佐と児玉源太郎大将」参照)。そのときの大本営は参謀総長が山縣有朋大将で参謀次長はのちの第十三師団長長岡外史少将であった。日露戦争の講和開始は明治38(1905)年5月27日から同月28日に行われた日本海海戦戦勝後の同年6月9日セオドア・ルーズベルトによる講和勧告とされている。しかし、陸軍は同年3月1日から10日にかけて行われた奉天会戦でロシア軍を破り奉天を占領したものの武器、弾薬の調達が目途たらず戦闘能力は既に限界を超えていると判断していた。そのような時期に動き出したのが児玉源太郎、堀内文次郎、山縣有朋、長岡外史の四人であった。その動きは明治38年(1905)年3月22日付で大本営陸軍参謀次長長岡外史から陸軍次官石本新六に「児玉大将秘密上京ノ件」とする連絡の中に見ることが出来る⁽⁴¹⁾。それによれば、児玉大将は同年3月22日に秘密裏に満洲をたち東京に向かったことが書かれている。大本営は何らかの打ち合わせを行うため児玉大将を緊急に内地に呼び戻したのである。その時に副官であった堀内も一緒に上京していた。そして、山縣総参謀長はかねてから顔見知りの堀内副官を連絡役として使い、明治38(1905)年4月7日に「同日の午後2時半に大本営で待つ」という親書を携えて杉山の許を訪ねさせた。このとき参謀総長山縣元帥は一介の浪人である杉山茂丸を呼んで講和の準備を進めるように依頼したのである。日露講和に向けた陸軍内部の様子は『信水堀内文次郎將軍を悼む』に以下のように書かれている。

……殊に日露の国交破れ、明治三十八年四月大戦終結の危機に際し、参謀総長山縣元帥が無位無官の浪人杉山氏を大本営に呼寄せたるは誰も張膽駭目せし所、堀内副官元帥よりの呼出しの秘翰を手にし驚かざるを得ず、之れぞ思ひも寄らぬ日露講和も一大密事にてありしが、山縣公は杉山氏とは肝胆相照らし覆面の人物としての会見固より怪むに足らず、愈山縣元帥は講和の大使命を帯びて其年七月十五日を以て御用船河内丸に搭じ、神戸を解纜し満洲軍総司令官大山元帥へ伝令の途に就かれたるなり。……

以上のような陸軍内部での講和に向けた動きは、日本海海戦以前に始まっていることから考えて、山縣元帥は海軍がバルチック艦隊に勝っても負けても講和を進めようとしていたと見ることが出来る。その後、明治38(1905)年7月7日に日本軍は樺太に上陸しロシアとの講和会議に向けた動きを加速させる中で、同月15日に杉山茂丸が再度満洲を訪れることになる。その時も堀内は日本から杉山に同行し奉天までの案内役を担当していた。尚、ロシアとの講和直前に行われた樺太上陸作戦は長岡外史の予てから持論の作戦であった。(「図6. 明治38年7月15日神戸港解纜御用船河内丸船上一向」参照)。

V. まとめ

明治40年に策定した「帝国国防方針」決定で大きな役割を果たした山縣総参謀長のロシアに対する考え

え方は、日本陸軍はロシアの復讐戦争に警戒すると共に将来の軍事行動を牽制するためには軍備を拡張しなければならないという考えかたであった。そのため「帝国国防方針」では、陸軍の主要な敵をロシアとし、海軍はアメリカとすることになった。そのロシアは明治44(1911)年頃になると極東での戦力を着実に回復させている中で、陸軍は師団の増設し兵力を増強することとロシアとの戦闘を研究しておく必要があった。その際に、冬季の部隊運用とその対策は避けては通れない重要な検討項目であった。また、後の歩兵第五十八連隊長堀内文次郎大佐は日露戦争時には満洲で児玉総参謀長の副官として勤務していたことから、冬季の軍隊移動及び物資補給が如何に困難であるかということを十分に熟知しており、その対策を検討しておく必要があった。そして、陸軍が冬季対策の検討を開始した頃にスキーに熟達したオーストリアの将校が雪国への派遣を希望していたことから、参謀本部にとって願ってもないことであったためレルヒ少佐を歩兵第五十八連隊の隊付として派遣することになったのである。レルヒ少佐のスキー教練は明治四十年帝国国防方針で日本陸軍が仮想敵国をロシアとしたことか始まり、その対策の一環として冬季作戦の困難さを知る長岡外史と堀内文次郎は熱心にスキーの習得を目指したのである。

今後の課題として、レルヒ少佐が高田で第五十八連隊や市民及び学生に対して懇切丁寧にスキーを教えたことは事実であるが、別の視点としてレルヒ少佐もオーストリア陸軍参謀本部の軍人であったことから、日本とロシアの緊張関係をどのように見ていたのかということと、オーストリアとロシア間にどのような緊張関係があったのか等も検討する必要があると考えている。

注

本論文で引用する国立公文書館「アジア歴史資料センター」が所蔵する資料は、「JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.」を省略した。また、アルファベットは、A(国立公文書館)、B(外務省外交史料館)、C(防衛省防衛研究所)を示している。尚、「新聞記事文庫」は神戸大学図書館蔵である。

- (1) 『日本スキー発祥 100 周年』 <http://ski100.jp/>。
- (2) 新井博『レルヒ 知られざる生涯』 道和書院(2011年)。
- (3) レルヒの会『スキー発祥』 ベースボール・マガジン社(1988年)。
- (4) 「瑞典国軍隊用スキー実験ノ件」 「大日記乙輯 明治四十四年」C02031419100。
- (5) 「外国武官学校参観ノ件」 「明治四十四年一月 壹大日記」C04014711000。
- (6) 「奥国大使館附武館命免ノ件」 「明治四十三年六月 壹大日記」C04014646400(第5から11画像目)。
- (7) 前出『レルヒ 知られざる生涯』 84頁。
- (8) 長岡忠一『日本スキー事始め』 ベースボール・マガジン社(1989年1月)36頁。
- (9) 「陸軍学校参観ノ件」 「明治四十四年一月 壹大日記」C04014711000。
- (10) 同上(10頁)。
- (11) 「瑞典国軍隊用スキー実験ノ件」 「大日記乙輯 明治四十四年」C02031419100(第3画像目)。
- (12) 「スキー研究報告及意見」 「大日記乙輯 明治四十四年」C02031419100(第50から59画像目)。
- (13) 同上(第52画像目)。
- (14) 「叙勲裁可」 明治四十四年 「叙勲裁可書 明治四十四年 叙勲卷五」A10112731400(第4から5画像目)。
- (15) 同上(第53画像目)。
- (16) 長岡忠一『日本スキー事始め』 ベースボール・マガジン社(1989年1月)77頁。
- (17) 「叙勲裁可」 明治四十四年 「叙勲裁可書 明治四十四年 叙勲卷五」A10112731400(第48から49画像目)。
- (18) 長岡忠一『日本スキー事始め』 44頁。
- (19) 同上書(81頁)。
- (20) 同上書(39頁)。
- (21) 「雪中用かんじき買上方願出」 「明治三十七年 満大日記」C03027663000。
- (22) 「藁靴調製支給ノ件」 「明治三十八年 満大日記 一月上」C03026097200。

- (23)「藁靴用滑止器買上額ノ件」明治三十八年 満大日記 一月上」C03026103200。
- (24)「32. 平山での専修将校(2)」、スキー発祥(19頁)。
- (25)長岡忠一『日本スキー事始め』122頁。
- (26)同上書(111頁)。
- (27)「外国武官成績報告ノ件」密大日記 明治四十五年 大正一年 三冊の内三」C03022314200(第3画像目)。
- (28)前出『スキー発祥 思い出アルバム』22頁。
- (29)「小出博士の講演」(1913年)北海タイムス(新聞)。
- (30)「スキー工業の常識」(1936年)中外商業新報(新聞)。
- (31)黒野耐『帝国国防方針の研究』総和社(2000年)。
- (32)同上書(86頁)。
- (33)同上書(105)。
- (34)同上書(89)。
- (35)黒野耐『帝国国防方針の研究』115頁。
- (36)田村尚也大「日本帝国海軍 栄光の50年史」『歴史群像(No. 85)』(2007年10月号)41頁。
- (37)同上書(115頁)。
- (38)同上書(152頁)。
- (39)大熊浅次郎『信水堀内文次郎将軍を悼む』筑紫史談八拾壹号集(1942年)。
- (40)杉山 茂丸(元治元年8月15日から昭和10(1935)年7月19日)は、明治から大正、昭和初期にかけて経済や外交、内政などに様々な献策を行った。在野の浪人であったが山縣有朋、松方正義、井上馨、桂太郎、兒玉源太郎、後藤新平、寺内正毅等と親交があった。長男は作家の夢野久作。
- (41)「兒玉大将秘密上京ノ件」明治四十四年一月 壹大日記」C04014711000。

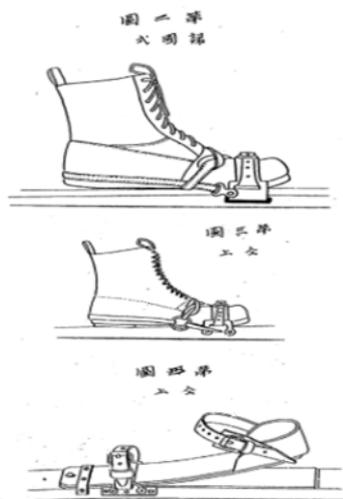


図 1. ノルウェー式スキー

出所:「瑞典国軍隊用スキー実験ノ件」
C02031419100(第 42 画像目)

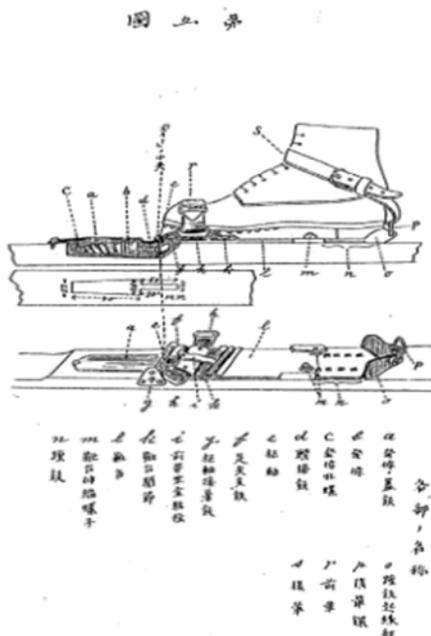


図 2. オーストリア式スキー

出所:「瑞典国軍隊用スキー実験ノ件」
C02031419100(第 43 画像目)

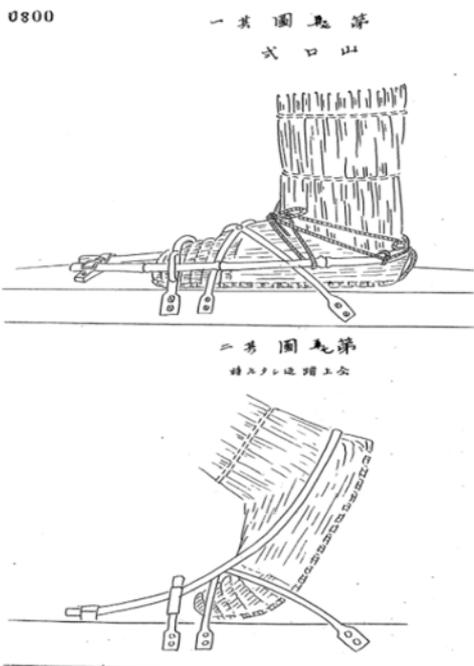


図 3. 山口式スキー

出所:「瑞典国軍隊用スキー実験ノ件」
C02031419100(第 44 画像目)



図 4. 大樑(俗称「スカリ」)

出所:鈴木牧之『北越雪譜』岩波文庫



図 5. 堀内文次郎大佐と児玉源太郎大将

出所:大熊浅次郎「信水堀内文次郎將軍を悼む」『筑紫史談八拾壹号集』(1942年5月)。左側が堀内文次郎で右側が児玉源太郎と思われる。撮影場所は児玉源太郎大将の寢室前と書かれている。



図 6. 明治 38 年 7 月 15 日神戸港解纜御用船河内丸船上一向

出所:大熊浅次郎「信水堀内文次郎將軍を悼む」『筑紫史談八拾壹号集』(1942年5月)。この写真のキャプションには前列右から大島健一、山縣有朋、田村惇。後列平井政遵、二宮熊次郎、杉山茂丸、堀内文次郎、山内豊景、高柳日本郵船会社印、河内丸スチワード。

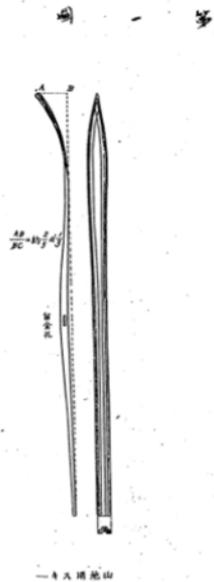


図 7. 山地用スキー(ノルウェー式)

出所:「瑞典国軍隊用スキー実験ノ件」C02031419100(第 37 画像目)

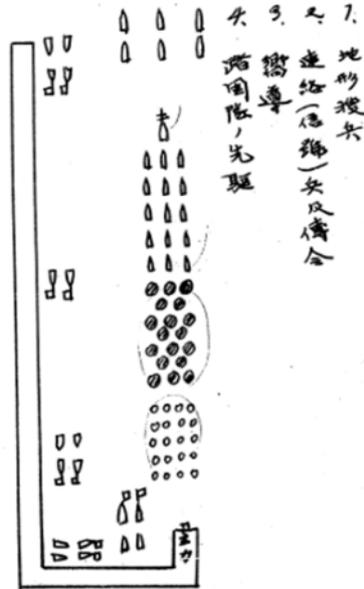


図 8. 雪中行軍時のスキーの利用

出所:「瑞典国軍隊用スキー実験ノ件」C02031419100(第 37 画像目)

表 1. スキー種別毎の単価表

	品目	製作所	単価(円)
スキー 樫材	栗	高田	2.00
	胡桃	全	2.30
	樺	全	2.70
	樫	全	4.00
付属金具 及び革	ノルウェー式	全	1.40
	オーストリア式	全	2.80
	同	砲兵工廠	2.50
	山口式	高田	1.00
	スキー負革	全	0.65
杖	ノルウェー式	全	0.45
	オーストリア式	全	0.35
右完備 の品	ノルウェー式	全	4.40
	オーストリア式	全	5.80
		砲兵工廠	4.67
	山口式		4.00
	オーストリア式背囊		3.00
	長手袋		1.22

出所:「瑞典国軍隊用スキー実験ノ件」

「大日記乙輯明治四十三年」C02031419100(第 37 画像目)より筆者編集

表 2. 雪質による速度比較 (△: 短距離毎に休息を要するもの)

地形及雪の景況		スキー速度(km)	標速度(km)	藁靴速度(km)
降雪後若干日を経表雪一度融解し寒気 の為脚元凍結したるもの	山地	6~8	2.5~3.5	2~3
	平野	5~6	3~4	2.5~3.5
降雪後数日を至表雪圧縮したるもの	山地	4~6	△2	△1~1.5
	平野	3~5	△2~3	△2
降雪中	山地	2~3	△0.3~1	行進不能
	平野			
最少量降雪中又は吹雪	山地	2以下	行進不能	行進不能
	平野			

出所:「瑞典国軍隊用スキー実験ノ件」「大日記乙輯明治四十三年」

C02031419100(第 37 画像目)より筆者編集。